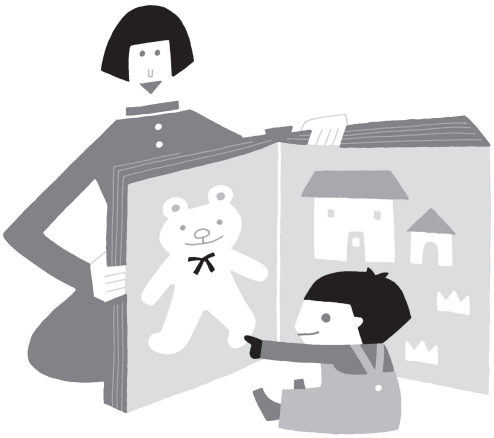
第2章

母親の教育・子育てに関する意識

邵　　勤風（1～3節）
橋本　尚美（4・5節）
朝永　昌孝（6節）
荒牧美佐子（7節）



第1節 母親にとっての子どもの存在

母親にとっての子どもは「生活や人生を豊かにしてくれる存在」であり、「自分とは独立した人格を持つ存在」でもある。子どもを「先祖や家を受け継いでくれる存在」とみている母親は少ない。また母親にとっての子どもの存在のとらえ方は、子どもの年齢や母親の就業状況によって異なる。

本章では、母親の子育てや教育に関する意識を探りたい。その前に、そもそも母親にとって、子どもとは一体どのような存在だろうか。子どもの存在自体をどうみるのかは、母親の子育てや教育に対する意識や乳幼児の生活に一定の影響を与えるのではないかと考え、10年調査では新規項目として、子どもの存在について母親はどう考えているのかをたずねることにした。

子どもを「生活や人生を豊かにしてくれる存在」と考えている母親は86.5%

図２－１－１はその全体数値を示している。「生活や人生を豊かにしてくれる存在」(86.5%)は他を引き離して第１位で、「自分とは独立した人格を持つ存在」(49.9%)は第２位、「夫婦関係をつないでくれる存在」(48.4%)は第３位となっている。一方、社会全体が豊かになってきたこともあってか、子どもを「苦労や心配が多い存在」(20.4%)、「お金のかかる存在」(15.9%)と考えている母親は１～２割にとどまっている。また、「先祖や家を受け継いでくれる存在」は16.4%で、現在子どもを後継ぎの存在としてみている母親は首都圏においては少数派であることがわかった。

これらの数値は何を意味しているのだろうか。子どもを、家の後継ぎや労働力としてみている時代から近代化、都市化が進み、少子化の時代となった現在、社会・家庭・母親それぞれにとって、子どもの存在のとらえ方が大きく変わったのではないかと考えている。この質問は10年調査に新たに追加したため、残念ながら経年変化をみることができないが、10年調査の結果から、子どもは親の人生を豊かにさせてくれる存在であり、母親は基本的に子どもを産み育てることを楽しんでいると解釈してもよいであろう。また、子どもが将来親の面倒をみてくれることを期待するのではなく、少子高齢化社会を支える社会的な存在としてみている部分もあると考えられる(「将来の社会をになってくれる存在」29.1%)。一方、昔からよくいわれるように、子どもは互いに血のつながりのない夫婦関係をつないでくれる存在、家族のきずなを強くしてくれる存在であるという考えは今も変わっていないことがわかった。これからも時代の変化とともに、母親にとっての子どもの存在のとらえ方もさらに移り変わっていくかもしれない。さまざまなことを考えさせられる興味深いデータである。

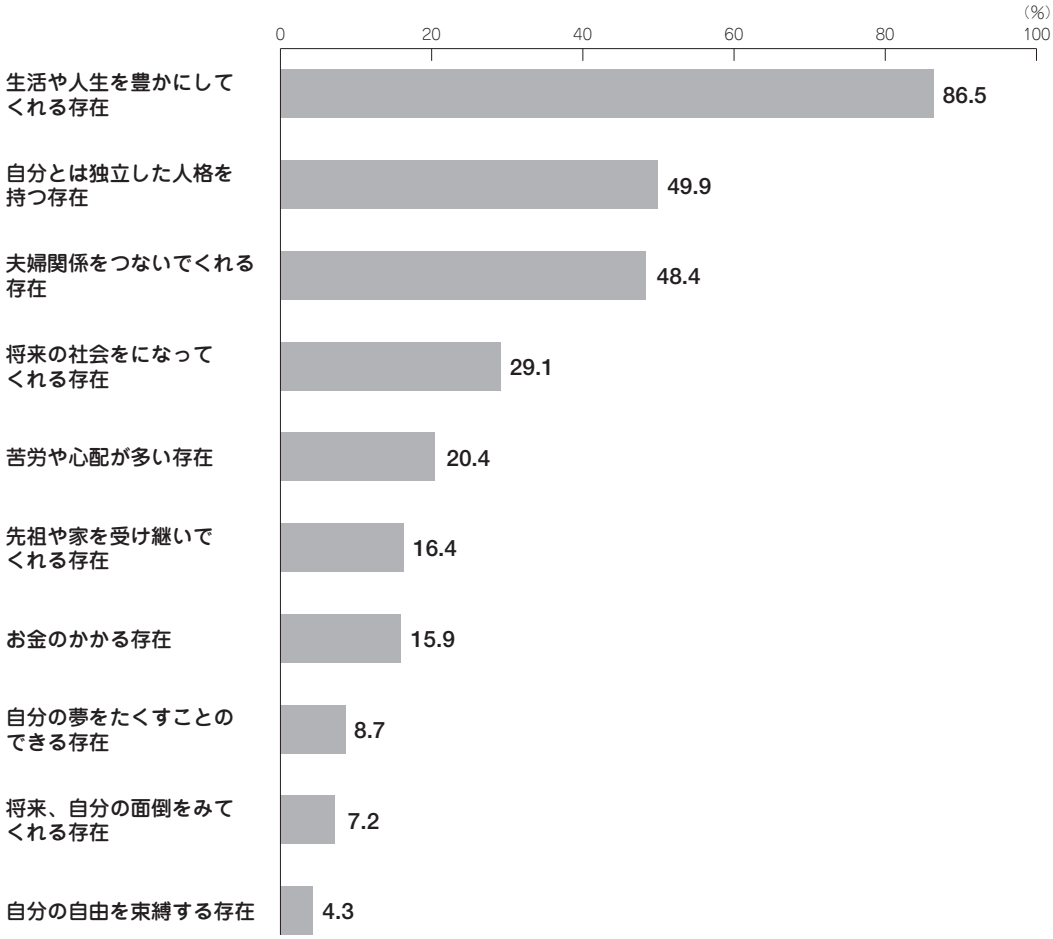
子どもが成長するにつれ、子どもを「自分とは独立した人格を持つ存在」と考えている母親が増加

子どもの存在のとらえ方は子どもの年齢や母親の年齢によって異なるのではないかと考えている。ただし、子どもの年齢があがるにつれ母親の平均年齢もあがるため、ここでは、子どもの年齢を取りあげたい(**図２－１－２**)。

子どもの年齢があがるにつれ、子どもを「夫

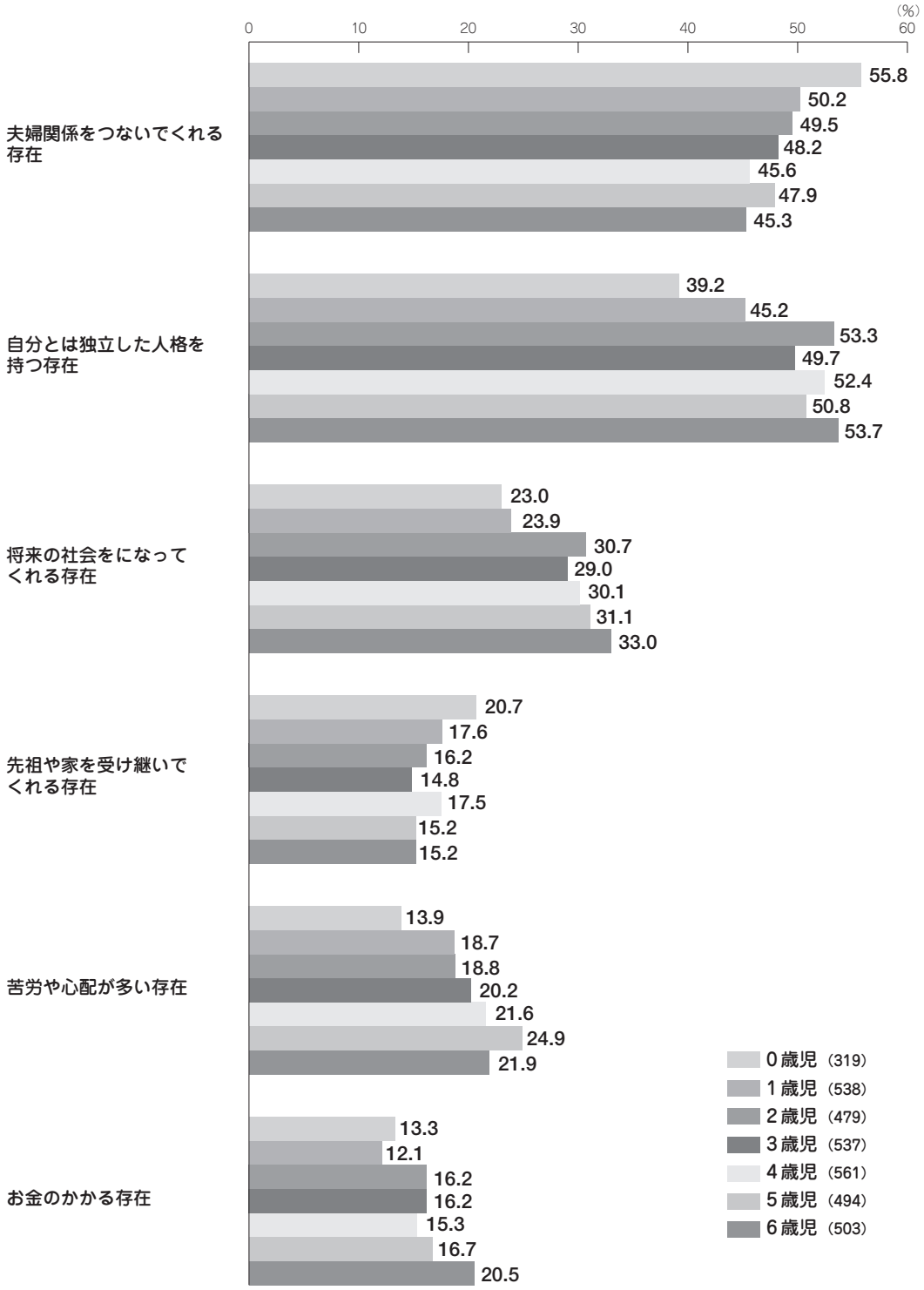
婦関係をつないでくれる存在」（０歳児55.8%→６歳児45.3%）、「先祖や家を受け継いでくれる存在」（０歳児20.7%→６歳児15.2%）と考えている母親が減少している。それに対して、「自分とは独立した人格を持つ存在」（０歳児39.2%→６歳児53.7%）、「将来の社会をになってくれる存在」（０歳児23.0%→６歳児33.0%）の回答比率が増加しており、子どもの年齢があがるとともに、子どもを社会的な存在とする認識が高まっている。一方、子どもを「苦労や心配が多い存在」「お金のかかる存在」と考えている母親は約１割から約２割へ増加している。子どもの成長につれ、心配ごとが増え、教育費などはやはりそれなりにかかると、母親は感じているのだろう。

図２－１－１　母親にとっての子どもの存在（10年）



注１）複数回答。
注２）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注３）サンプル数は3,431人。
注４）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図２－１－２　母親にとっての子どもの存在（子どもの年齢別　10年）



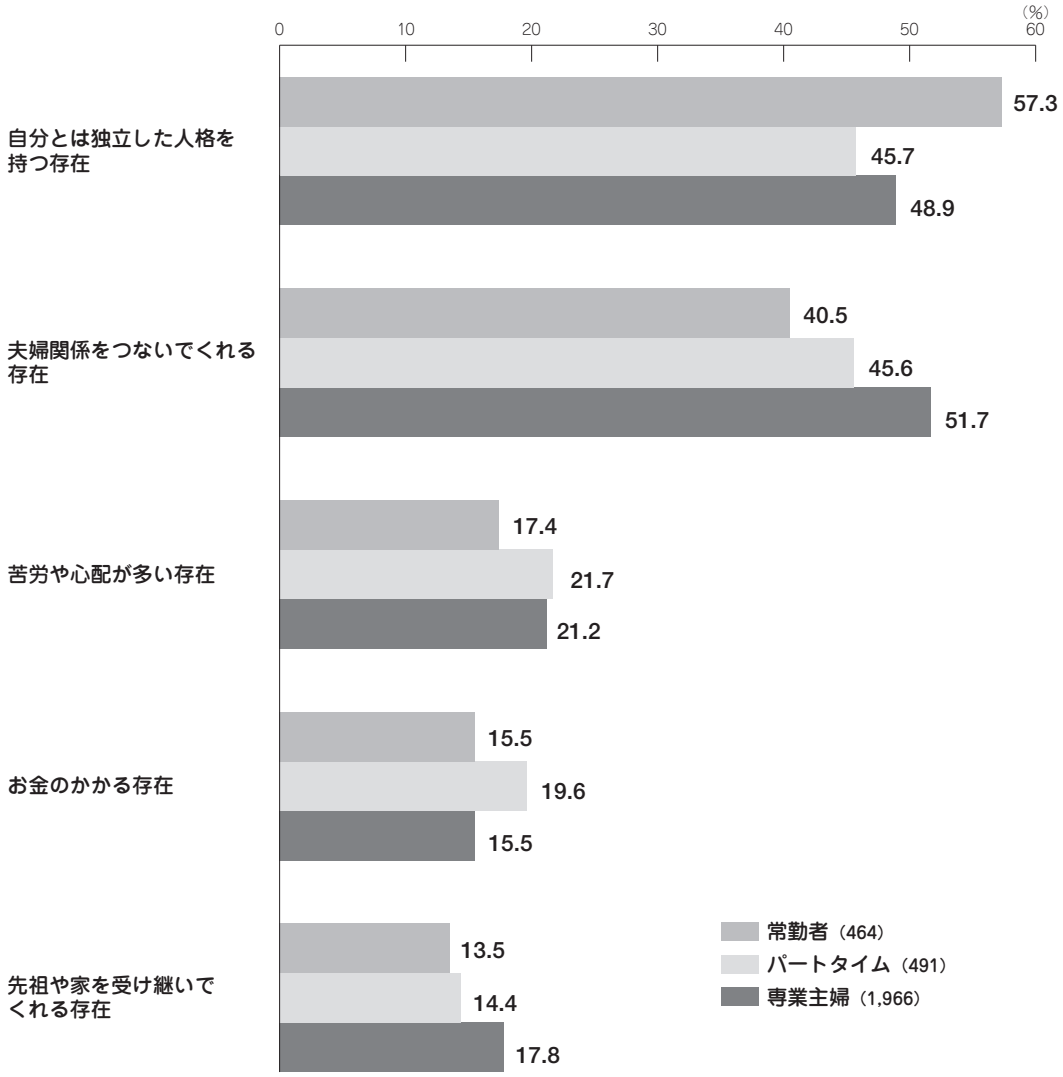
注１）複数回答。
注２）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注３）10項目のうち６項目を図示。
注４）（　）内はサンプル数。
注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

母親の就業状況により意識が異なる

母親の就業状況別に差がみられた５項目のみをピックアップし、グラフにしたのが**図２－１－３**である。

他の就業状況と比較して数値が高かったのは、常勤者では「自分とは独立した人格を持つ存在」（常勤者57.3％、パートタイム45.7％、専業主婦48.9％）、専業主婦では「夫婦関係をつないでくれる存在」（常勤者40.5％、パートタイム45.6％、専業主婦51.7％）、パートタイムでは「お金のかかる存在」（常勤者15.5％、パートタイム19.6％、専業主婦15.5％）であった。母親の就業状況によって、子どもに対する考えは異なっている。

図２－１－３　母親にとっての子どもの存在（母親の就業状況別　10年）



注１）複数回答。
注２）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注３）10項目のうち５項目を図示。
注４）（　）内はサンプル数。
注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

第2節 母親の子育て観

この５年間で、自分の生き方より子育てのほうを優先する母親、子どものしつけに対して厳しくなった母親が増加している。また母親の就業状況別でみると、働く母親の意識は専業主婦に比べ、この５年間の変化が大きい。

自分の生き方より子育てを優先する母親が増加

本節では母親の子育て観に関して、05年からの５年間で、どのような変化があったのかをみていきたい。子育てや子どもの教育に関するＡとＢの２つの意見のうち、母親の気持ちに近いほうを選択してもらった結果を**図２－２－１**で示している。

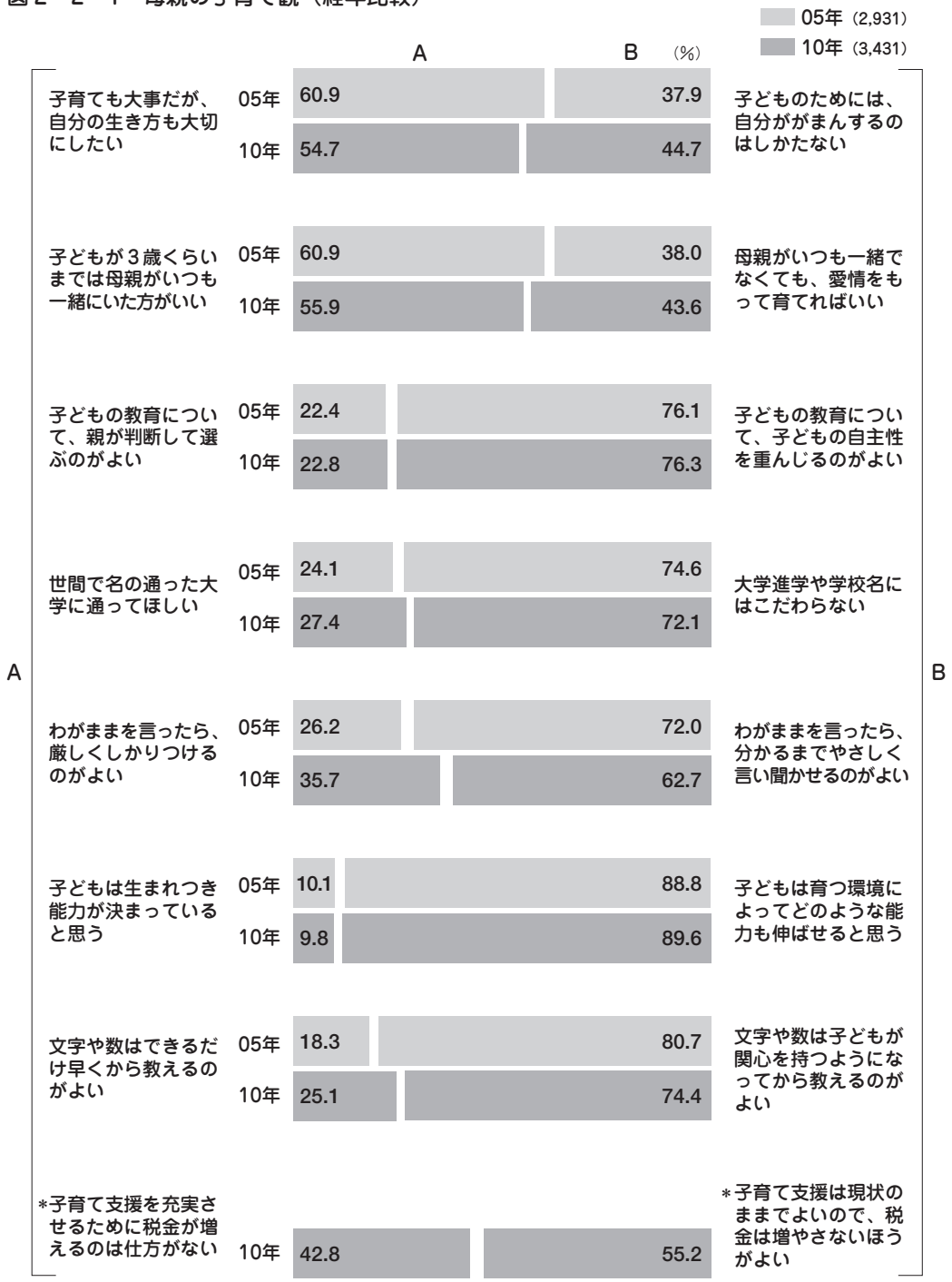
まず、子育てと母親自身の生き方について、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」は05年では60.9％だったが、10年では54.7％と6.2ポイント減少したのに対して、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」は05年では37.9％だったが、10年では44.7％と6.8ポイント増加し、10年調査ではこの２つの考え方の差が縮まった。自身の生き方より子育てを優先する母親の気持ちが、この結果となって表れたと考えている。一方、いわゆる「３歳児神話」に対する母親の考えをたずねた項目である「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」については、05年では60.9％だったが、10年では55.9％と5.0ポイント減少し、「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」は05年では38.0％だったが、10年では43.6％と5.6ポイント増加した。10年調査では、愛情をもって子育てすれば３歳まで子どもといつも一緒にいなくても大丈夫であると考えている母親が増加しており、いわゆる「３歳児神話」を信じている母親との差が縮まった形となった。

子どものしつけについては、「わがままを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい」と考えている母親は05年の26.2％から10年は35.7％と、9.5ポイントも増加した。「わがままを言ったら、分かるまでやさしく言い聞かせるのがよい」と回答した母親は9.3ポイント減少し、72.0％から62.7％となった。少数ではあるが、子どもを厳しくしつけたほうがよいと考えている母親が増えたことがわかった。

文字や数の習得については、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」は05年の18.3％から6.8ポイント増加し、10年は25.1％となった。「文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい」と考えている母親は80.7％から74.4％に減少した。また、「世間で名の通った大学に通ってほしい」を選択した母親は3.3ポイント増加傾向である（05年24.1％→10年27.4％）。母親の子どもの学歴へのこだわりが強まったこと、早い時期から文字や数を教えたほうがよいと考えていることから、近年さまざまな調査からわかった子育てや子どもの教育に対してより熱心になった母親の様子は、この調査からも再確認できたといえよう。

また、10年調査で新たに追加した子育て支援のための税金の使い方に関する項目については、「子育て支援を充実させるために税金が増えるのは仕方がない」という考え方を支持する母親は42.8％で、「子育て支援は現状のままでよいので、税金は増やさないほうがよい」と子育て支援のための増税に賛成できない母親は55.2％と、ほぼ意見が分かれていることがわかった。

図２－２－１　母親の子育て観（経年比較）



注１）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注２）無答不明があるため、Ａの意見とＢの意見の数値を合計しても100%にはならない。
注３）＊は10年調査のみの項目。
注４）（　）内はサンプル数。
注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

4歳児の母親はほかの年齢の子どもをもつ母親に比べ、子育て観における変化が大きい

次に、経年で子どもの年齢別の母親の子育て観について確認してみよう。ここでは、もっとも変化がみられた母親自身の生き方と子育てのバランス、子どものしつけ、文字や数を教える時期といった3項目を取り上げ、子どもの年齢別の経年変化を記述する（**表2－2－1**）。まず、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」を選択した母親の10年調査の比率をみると、1歳児、2歳児、5歳児をもつ母親では05年とほぼ横ばいである。しかし、4歳児、6歳児、0歳児をもつ母親はそれぞれ15.3ポイント、11.0ポイント、7.2ポイント減少している。

子どものしつけに関しては、「わがままを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい」の比率をみると、いずれの年齢の子どもをもつ母親の回答も05年に比べ、5ポイント以上増加している。とくに4歳児、5歳児をもつ母親では増加幅が大きい。また、いずれの年齢の子どもをもつ母親においても、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」の回答は増加傾向にある。とくに4歳児は10ポイント以上増加している。

上述の数値からわかるように、4歳児をもつ母親はほかの年齢をもつ母親と比較して、子育て観の変化が大きい様子がうかがえる。なぜこのように大きな変化があったのかについては、4歳児の子どもの生活の変化や4歳児を取り巻く環境の変化などと合わせて、今後さらに分析していく必要があるだろう。

働く母親の子育て観における変化が大きい

母親の就業状況別の経年変化を**表2－2－2**にまとめてみた。「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」については、いずれの就業状況の母親の選択率も減少している。とくにパートタイムは70.8%から58.2%と、減少幅が大きい。母親自身の生き方と子育てのバランスに悩んでいるパートタイムの母親の姿が目に浮かぶ。「世間で名の通った大学に通ってほしい」に関しては、全体数値は微増ではあるが、母親の就業状況別にみると、常勤者の選択率は05年の25.5%から、6.0ポイント増加し31.5%であった。常勤者において、少数派ではあるが子どもを有名大学に進学させたい志向が強まったことがわかった。一方、「大学進学や学校名にはこだわらない」については、05年、10年ともにパートタイムの選択率がもっとも高く、10年は79.0%である。05年ではいずれの就業状況の母親においても意識の差はそれほどなかったが、10年調査の数値には明らかな差がみられた。文字や数を教える時期については、いずれの就業状況の母親も「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」を選択した比率が増えている。とくに専業主婦と常勤者の増加幅が大きい。母親の就業状況別の経年変化をみると、働く母親の層が変化している可能性があるのではと推測される。

表２－２－１　母親の子育て観（子どもの年齢別　経年比較）

（%）

		０歳児	１歳児	２歳児	３歳児	４歳児	５歳児	６歳児
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	05年	57.8	57.6	57.3	60.5	69.0	57.8	65.0
	10年	50.6	55.4	54.4	56.9	53.7	56.0	54.0
B. 子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	05年	41.6	41.9	41.9	38.3	30.0	39.7	33.5
	10年	49.1	44.0	45.4	42.6	45.6	42.8	45.6
A. わがままを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい	05年	20.1	22.2	24.0	26.0	25.7	27.2	35.4
	10年	25.7	29.6	33.4	35.3	38.4	39.1	43.5
B. わがままを言ったら、分かるまでやさしく言い聞かせるのがよい	05年	78.7	77.2	74.9	71.9	72.0	70.1	62.8
	10年	73.7	68.7	65.8	63.3	60.2	58.0	54.1
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	05年	32.9	26.3	22.2	17.2	10.8	11.9	14.3
	10年	40.6	33.3	28.7	21.3	20.9	15.1	22.9
B. 文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい	05年	66.5	73.3	77.3	81.9	88.2	85.6	84.6
	10年	59.1	65.6	70.8	78.0	78.6	84.5	76.7

注１）０歳６か月～６歳11か月の子どももをもつ母親の回答を分析。
注２）８対の項目のうち３対の項目を表示。
注３）無答不明があるため、Ａの意見とＢの意見の数値を合計しても 100%にはならない。
注４）子どもの年齢別のサンプル数は以下のとおりである。

（人）

	０歳児	１歳児	２歳児	３歳児	４歳児	５歳児	６歳児
05年	324	649	730	333	307	322	266
10年	319	538	479	537	561	494	503

注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

表２－２－２　母親の子育て観（母親の就業状況別　経年比較）

（%）

		常勤者	パートタイム	専業主婦
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	05年	68.9	70.8	57.3
	10年	64.4	58.2	50.4
B. 子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	05年	31.1	27.5	41.3
	10年	35.0	40.3	49.3
A. 世間で名の通った大学に通ってほしい	05年	25.5	20.9	24.6
	10年	31.5	20.4	27.9
B. 大学進学や学校名にはこだわらない	05年	74.5	77.6	73.9
	10年	67.6	79.0	71.9
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	05年	16.4	20.1	18.1
	10年	23.0	23.5	25.1
B. 文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい	05年	83.6	78.4	80.7
	10年	76.4	75.6	74.4

注１）０歳６か月～６歳11か月の子どももをもつ母親の回答を分析。
注２）８対の項目のうち３対の項目を表示。
注３）無答不明があるため、Ａの意見とＢの意見の数値を合計しても 100%にはならない。
注４）母親の就業状況別のサンプル数は以下のとおりである。

（人）

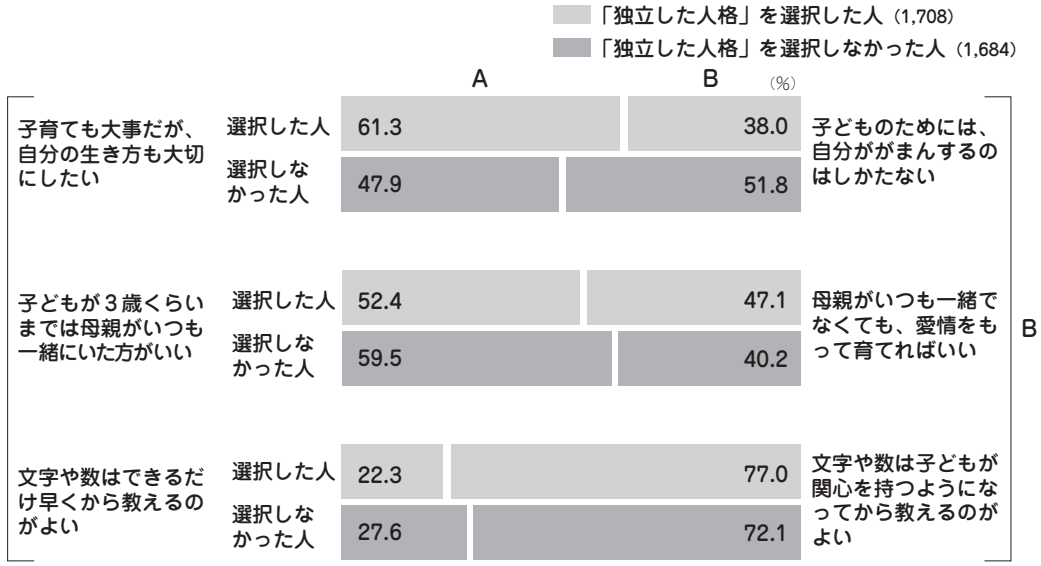
	常勤者	パートタイム	専業主婦
05年	248	290	2,072
10年	464	491	1,966

注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

子どもを「自分とは独立した人格を持つ存在」とみている母親は、そうでない母親と子育て観が異なる

前節では、母親が子どもの存在をどうみているかは、母親の子育て観に影響を与えるのではないかということに触れた。ここでは、子どもを「自分とは独立した人格を持つ存在」を選択したかどうかによって、母親の子育て観に違いがあるのかをみてみたい（**図２－２－２**）。子どもが「自分とは独立した人格を持つ存在」を選択した母親は「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」の回答比率が高く、61.3％である。一方、選択しなかった母親は自分の生き方より子育てを優先する傾向がみられた。また、子どもが「自分とは独立した人格を持つ存在」を選択しなかった母親が「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と回答した比率が高い（59.5％）。文字や数を教える時期については、「自分とは独立した人格を持つ存在」を選択した母親は「文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい」の回答比率が高い（77.0％）。

図２－２－２　母親の子育て観（「自分とは独立した人格を持つ存在」の回答別　10年）



注１）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注２）８対の項目のうち３対の項目を図示。
注３）無答不明があるため、Ａの意見とＢの意見の数値を合計しても100％にはならない。
注４）（　）内はサンプル数。
注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

第3節　今、子育てで力を入れていること

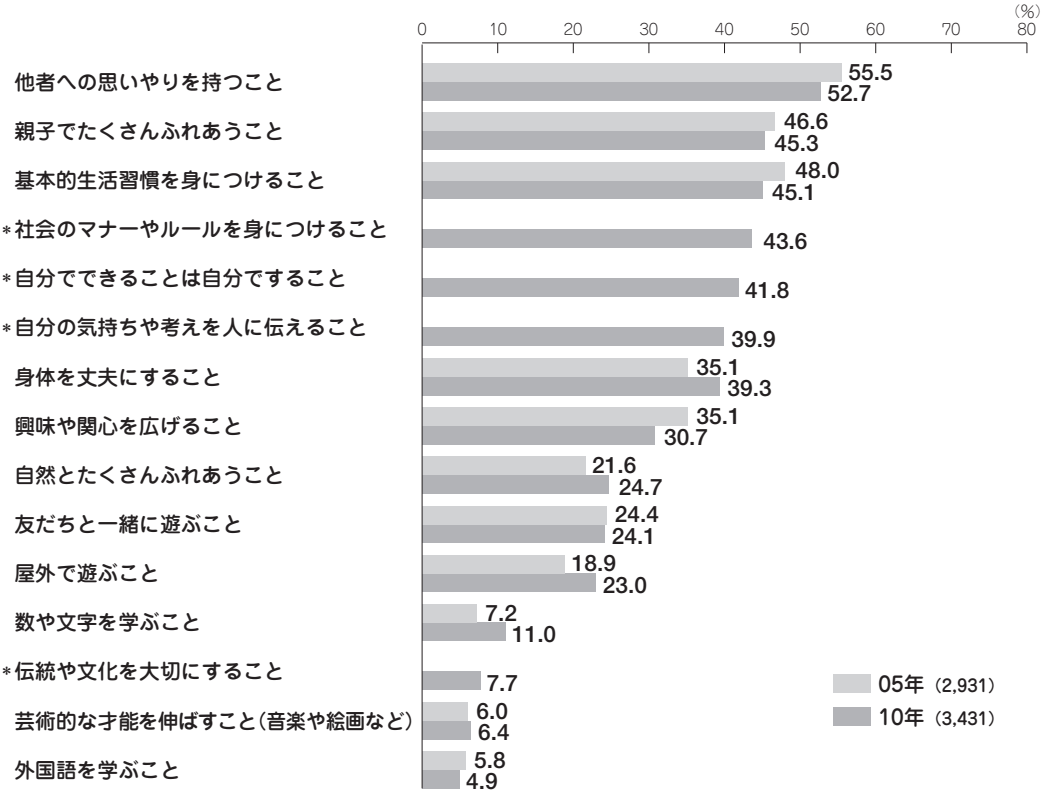
屋外での遊びやからだづくり、文字や数の学習を重視する母親は増加傾向である。また、子どもの性別や年齢によって傾向が異なっている。

屋外の遊びやからだづくり、文字や数の学習を重視する傾向がみられた

前節では母親の子育てに関する意識・考えの経年変化をみてきたが、ここでは、母親たちは今、子育てでどのようなことに力を入れているのかについて経年比較をしていく。**図2－3－1**は母親が子育てで力を入れていることについて、「とても力を入れている」と答えた比率の5年間の変化をグラフにしたものである。図から以下の特徴がわかった。

1点目は、上位3位は若干の順位の入れ替わりがあるが、基本的には05年と同様な項目が占めていることである。それは「他者への思いやりを持つこと」（05年55.5％→10年52.7％）、「親子でたくさんふれあうこと」（05

図2－3－1　子育てで力を入れていること（経年比較）



注1）「とても力を入れている」の%。
注2）0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注3）＊は10年調査のみの項目。
注4）（　）内はサンプル数。
注5）0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

年46.6%→10年45.3%)、「基本的生活習慣を身につけること」(05年48.0%→10年45.1%)である。

2点目は、外遊びやからだづくりをより重視する傾向がみられたことである。「自然とたくさんふれあうこと」(05年21.6%→10年24.7%)、「屋外で遊ぶこと」(05年18.9%→10年23.0%)、「身体を丈夫にすること」(05年35.1%→10年39.3%)は05年に比べ、それぞれ約3～4ポイント増加傾向にある。

3点目は、文字や数の学習を重視するようになったことである。「数や文字を学ぶこと」は05年の7.2%から、11.0%と増加傾向にある。

4点目は、「興味や関心を広げること」は05年の35.1%から、10年の30.7%と、4.4ポイント減少していることである。おそらく習い事をしている比率の減少、教育費の減少と関連していると考えられる。

5点目は、社会ルールの習得、自立、人との関係づくりを重視することである。「社会のマナーやルールを身につけること」「自分でできることは自分ですること」「自分の気持ちや考えを人に伝えること」の3項目は、10年調査で新たに追加したため、経年比較はできないが、それぞれ4割程度の回答を得られた。

子どもの性別と関係なく、「興味や関心を広げること」に力を入れている母親は減少

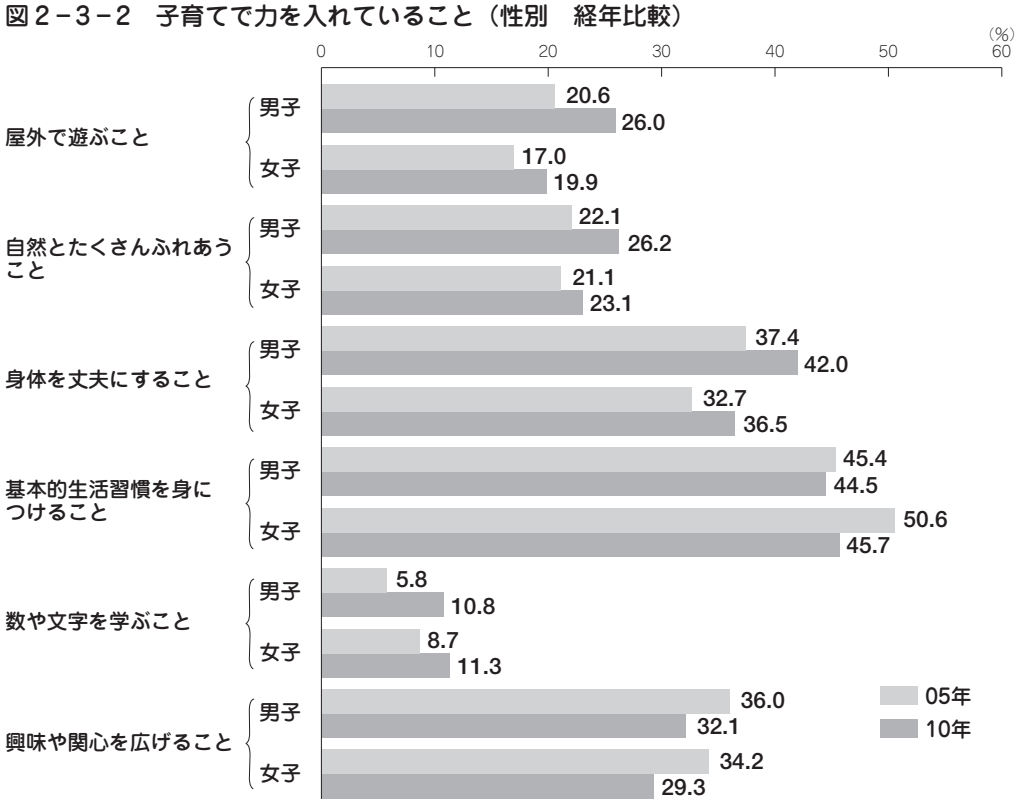
次に、子どもの性別での経年変化をみていく。ここでは基本的には変化がみられた項目に絞って、全体数値の変化が男女どちらによるものなのかを明らかにしたい。**図2－3－2**から以下のことがわかった。1点目は、男子をもつ母親は屋外での遊びやからだづくり、また文字や数の学習について、05年に比べ、重視するようになってきたことである。2点目は、女子をもつ母親は「基本的生活習慣を身につけること」において、この5年間で4.9ポイント減少したことである。全体数値をみると、ほぼ横ばいといってもよいが、子どもの性別でみると、減少傾向にある女子の数値が全体数値に影響を与えていることがわかった。3点目は、「興味や関心を広げること」の数値は、子どもの性別と関係なく、ともに減少したことである。

子どもの年齢による変化がみられた

この節の最後に、子どもの年齢による経年変化がみられたのかを調べたい(**表2－3－1**)。「屋外で遊ぶこと」では、0歳児、2歳児、3歳児をもつ母親の回答比率はとくに増加し、ほかの年齢の子どもをもつ母親の回答比率もやや増加傾向にある。「自然とたくさんふれあうこと」では、0歳児と4歳児以外の年齢の子どもをもつ母親の数値が増加傾向にある。「身体を丈夫にすること」は、4歳児で増加幅が大きい。全体的にみると、いずれの年齢の子どもをもつ母親も屋外での遊びやからだづくり、自然とのふれあいをより重視する傾向である。また、「数や文字を学ぶこと」もいずれの年齢の子どもをもつ母親の回答も増加傾向にある。前節で述べた母親の子育て観では、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」を選択した母親が増加していたが、母親の意識の変化がこういった母親の実際の日々の子育て行動に反映していると考えられている。

また「親子でたくさんふれあうこと」では、全体数値では変化がみられなかったが、子どもの年齢別でみると、とくに0歳児、1歳児をもつ母親の回答が減少していることがわかった。10年調査では05年調査に比べ、母親と一緒に遊ぶことがさらに増加傾向にあることから、すでに親子でたくさんふれあっているので、とりわけ力を入れることもないと母親は考えているかもしれない。また1歳6か月以上に絞ってみると、とくに数値の変化がみられなかった。さらに「興味や関心を広げること」はいずれの年齢の子どもをもつ母親でも、数値が減少している。とくに6歳児の減少幅が大きいことがわかった。

図２－３－２　子育てで力を入れていること（性別　経年比較）



注１）「とても力を入れている」の%。
注２）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注３）15項目のうち６項目を図示。
注４）サンプル数は05年男子1,461人、女子1,470人、10年男子1,694人、女子1,737人。
注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

表２－３－１　子育てで力を入れていること（子どもの年齢別　経年比較）

（%）

		０歳児	１歳児	２歳児	３歳児	４歳児	５歳児	６歳児
屋外で遊ぶこと	05年	12.0	22.4	22.4	18.6	17.9	17.2	18.0
	10年	16.5	24.4	27.7	25.8	21.2	20.3	21.9
自然とたくさんふれあうこと	05年	22.6	24.5	23.0	22.5	25.1	18.0	15.8
	10年	20.6	29.0	26.7	24.4	24.3	23.3	22.5
親子でたくさんふれあうこと	05年	70.4	64.2	51.9	46.4	43.3	33.5	28.5
	10年	65.3	59.4	52.9	43.8	39.9	35.3	29.7
身体を丈夫にすること	05年	39.9	40.9	33.6	35.1	32.5	34.0	32.3
	10年	39.5	41.5	40.1	38.4	41.0	37.9	37.0
数や文字を学ぶこと	05年	2.2	4.1	5.5	7.6	8.8	7.6	12.1
	10年	5.8	7.8	9.4	10.2	13.7	12.4	15.4
興味や関心を広げること	05年	43.7	40.7	34.4	30.3	29.6	33.5	38.3
	10年	37.2	37.9	31.7	29.1	27.1	27.5	27.7

注１）「とても力を入れている」の%。
注２）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注３）15項目のうち６項目を表示。
注４）子どもの年齢別のサンプル数は以下のとおりである。

（人）

	０歳児	１歳児	２歳児	３歳児	４歳児	５歳児	６歳児
05年	324	649	730	333	307	322	266
10年	319	538	479	537	561	494	503

注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

第4節 子どもの将来に対する期待

母親は、子どもが将来、人とのかかわりを大切にすることを期待しているが、社会的成功への期待も強めている。性別では、女子にはより人とのかかわりを、男子には社会的成功を期待しており、05年調査と比べて性差は縮まっていない。

母親は、子どもに将来どのような人になってほしいと思っているのだろうか。また、それはこの5年間でどのように変化しているのだろうか。これらの意識は、母親の子育てに少なからず影響を及ぼしていると思われる。

社会的成功を期待する傾向が強まっている

図2－4－1は、母親が子どもに将来どのような人になってほしいと思っているかについて、経年比較を行ったものである。これをみると、05年調査、10年調査とも、家族、友人、他人などの対人関係に関する項目が第1～3位を占め、母親は、引き続き、人とのかかわりを重視していることがわかる。しかし、順位には変動があり、「自分の家族を大切にする人」の比率がやや増加して第1位（74.1%）に、「友人を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」の比率がやや減少して、それぞれ第2位（72.6%）、第3位（63.6%）になった。05年調査に比べて、友人、他人よりも家族を重視する傾向がみられる。

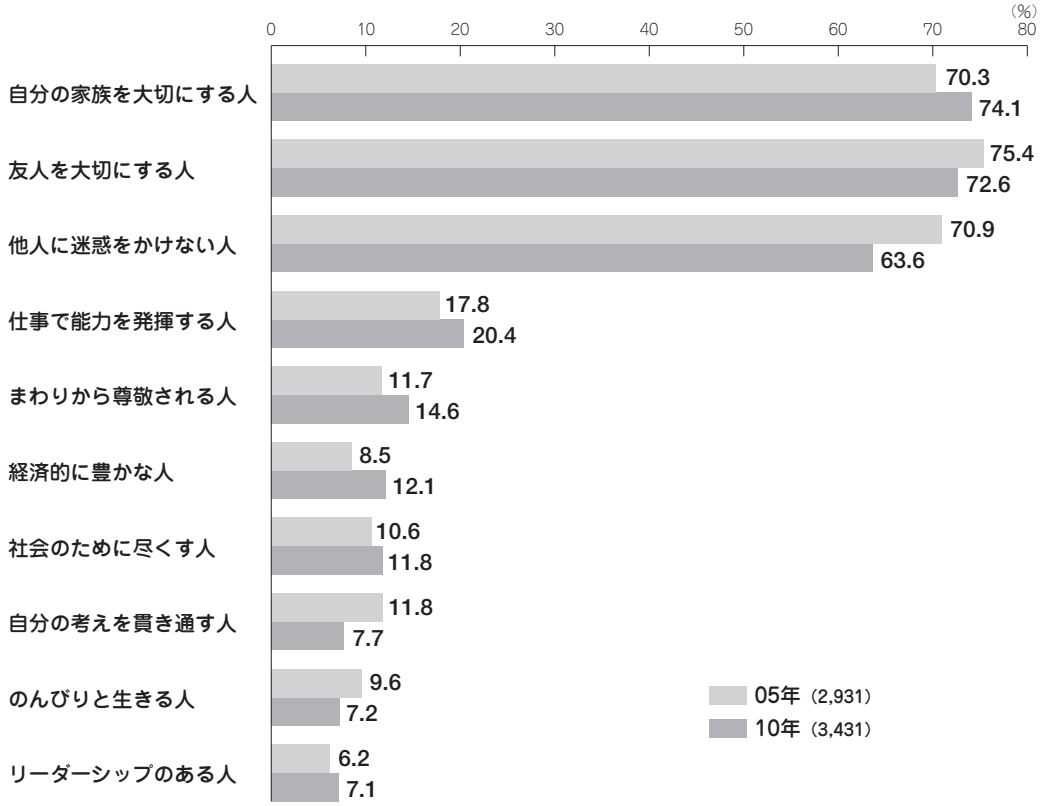
また、第4位以下をみると、05年調査に比べて、「経済的に豊かな人」の順位があがり（第9位から第6位）、その結果、第4～6位には「仕事で能力を発揮する人」（20.4%）、「まわりから尊敬される人」（14.6%）、「経済的に豊かな人」（12.1%）と、社会的成功に関連する項目が並んだ。この3項目はいずれも、05年調査に比べて比率がやや増加しており、社会的成功を期待する傾向が強まっているといえよう。

将来に対する期待は、子どもの性別によって異なっており、性差は縮まっていない

次に、子どもの将来に対する期待が、子どもの性別によってどう異なるかをみてみよう。

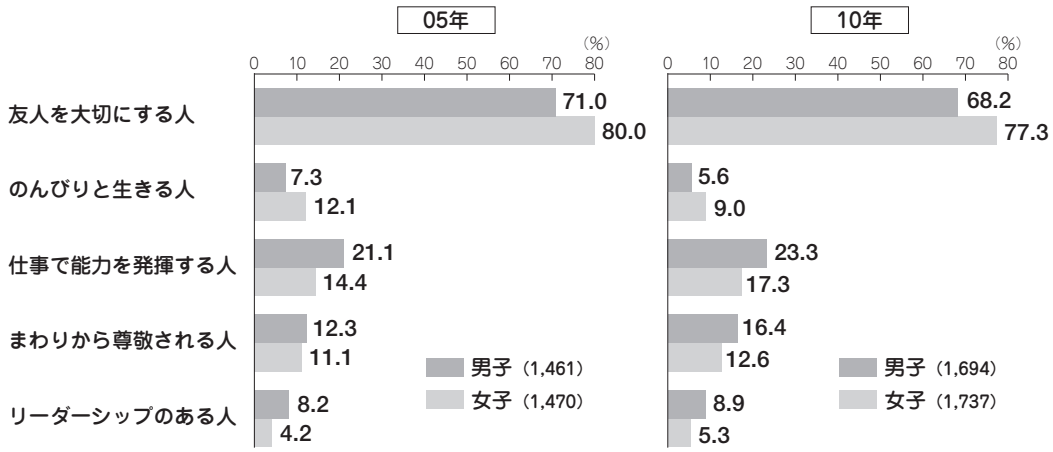
図2－4－2は、10年調査で性別による差が3ポイント以上あった5項目について、05年調査、10年調査の結果を示したものである。10年調査をみると、女子に対する期待が高いのは、「友人を大切にする人」（9.1ポイント差）などで、母親は女子に、より人とのかかわりを望んでいる。一方、男子に対する期待のほうが高いのは、「仕事で能力を発揮する人」（6.0ポイント差）などで、母親は男子に、より社会的成功を望んでいる。これらの性差は、05年調査の結果とほぼ同様であり、子どもの将来に対する期待についての性差は縮まっていないといえよう。

図２－４－１　子どもの将来に対する期待（経年比較）



注１）10 項目の中から、３つまで選択。
注２）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注３）（　）内はサンプル数。
注４）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

図２－４－２　子どもの将来に対する期待（性別　経年比較）



注１）10 項目の中から、３つまで選択。
注２）０歳６か月～６歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
注３）10 年調査で性差が３ポイント以上あった５項目を示している。
注４）（　）内はサンプル数。
注５）０歳６か月～６歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

第5節 子どもの進学や留学に対する期待

母親の高学歴志向はやや強まり、高校卒業の母親も徐々に子どもに高学歴を期待するようになっている。性別では、男子により高学歴を望んでいるが、性差は徐々に縮まっている。母親の４人に１人は、将来子どもを留学させたいと考えている。

母親は、子どもの進学に対してどのような期待をしているのだろうか。また、それはこの15年間でどのように変化しているのだろうか。10年調査では新たに、留学についてもたずねたため、合わせて検討する。

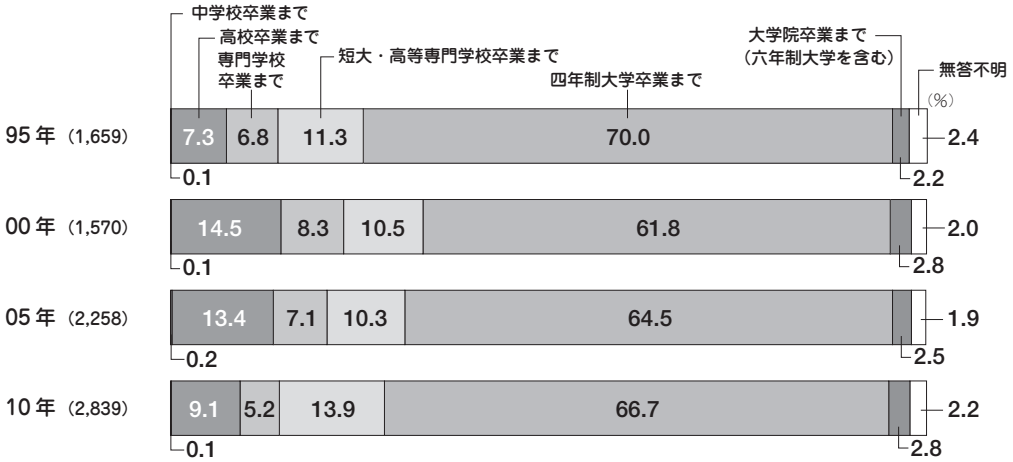
８割以上の母親が、子どもに短大卒業以上の学歴を期待している

図２－５－１は、母親が子どもをどの程度まで進学させたいと思っているかについて、経年比較を行ったものである。これをみると、95年調査から00年調査では、「高校卒業まで」の比率が増加し（95年7.3%→00年14.5%、以下同）、「四年制大学卒業まで」の比率が減少したが（70.0%→61.8%）、00年調査から10年調査までは一貫して、「高校卒業まで」の比率が減少し（14.5%→13.4%→9.1%）、「四年制大学卒業まで」の比率が増加している（61.8%→64.5%→66.7%）。また、05年調査から10年調査にかけては、「短大・高等専門学校卒業まで」の比率もやや増加したため（10.3%→13.9%）、10年調査では、短大卒業以上（「短大・高等専門学校卒業まで＋四年制大学卒業まで＋大学院卒業まで」）の学歴を期待する母親は８割を超えている。母親の高学歴志向は強まっているといえよう。

母親は、男子により高い学歴を期待しているが、性差は徐々に縮まっている

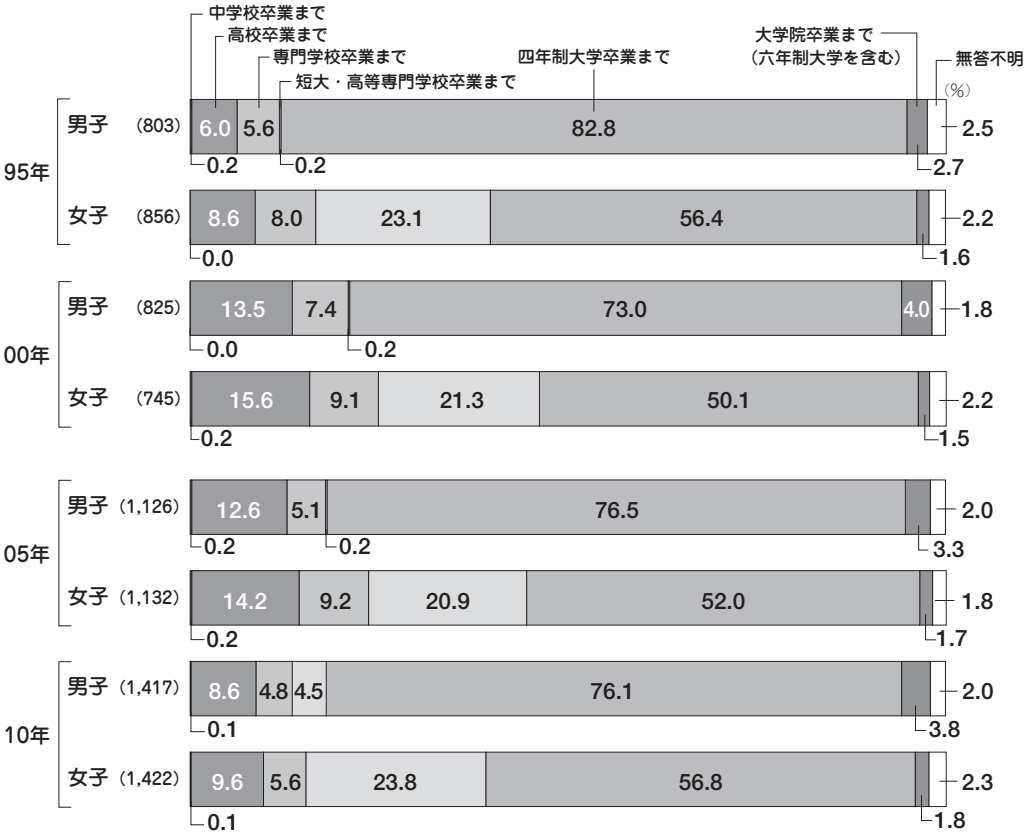
次に、進学に対する期待が、子どもの性別によってどう異なるかをみてみよう。**図２－５－２**をみると、女子に対して「短大・高等専門学校卒業まで」を望む比率はどの年も20%強であり、そのため、大学卒業以上（「四年制大学卒業まで＋大学院卒業まで」、以下同）を期待する比率は、性差が大きい（男子は、95年85.5%→00年77.0%→05年79.8%→10年79.9%、女子は58.0%→51.6%→53.7%→58.6%）。母親は、男子により高い学歴を期待している。しかし、大学卒業以上の学歴を望む比率の性差（男子－女子）をみると、95年調査から、27.5ポイント差→25.4ポイント差→26.1ポイント差→21.3ポイント差と変化しており、性差は徐々にではあるが縮まっているといえよう。

図２－５－１　子どもの進学に対する期待（経年比較）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで（六年制大学を含む）」は「大学院卒業まで」とたずねた。
注３）（　）内はサンプル数。

図２－５－２　子どもの進学に対する期待（性別　経年比較）

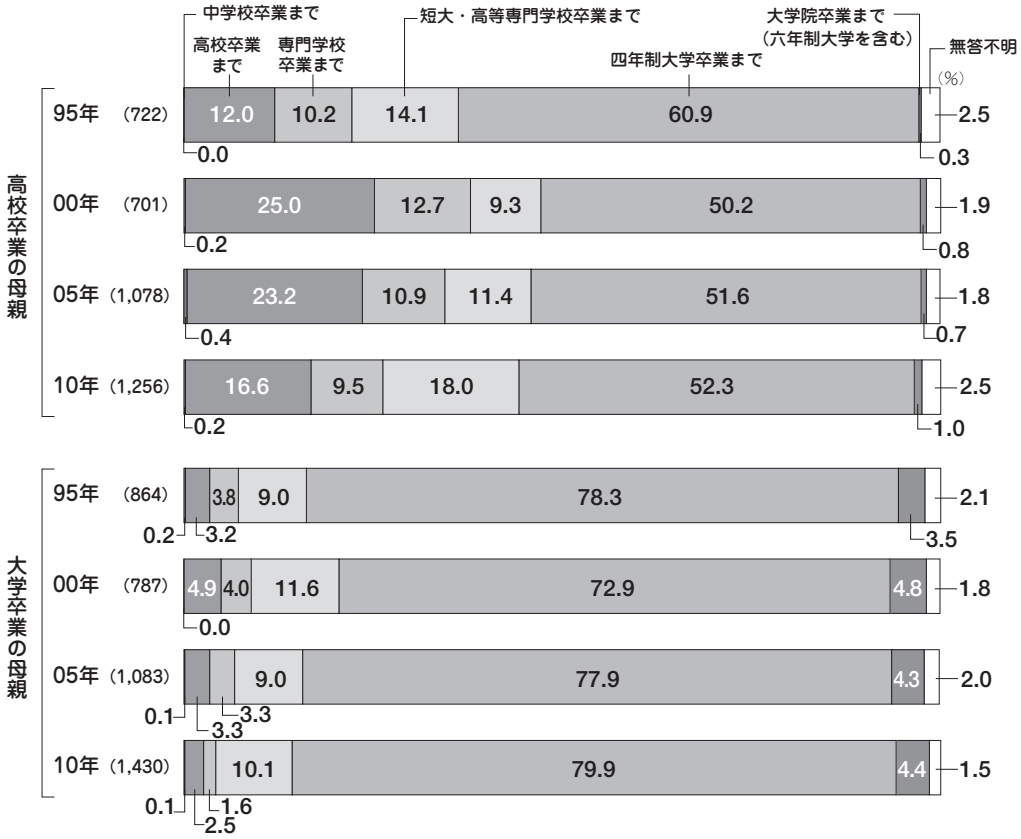


注１）母親の回答のみ分析。
注２）95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで（六年制大学を含む）」は「大学院卒業まで」とたずねた。
注３）（　）内はサンプル数。

高校卒業の母親も、子どもに高い学歴を期待するようになっている

次に、子どもの進学に対する期待が、母親の学歴によってどう異なるかをみてみよう（**図２－５－３**）。高校卒業の母親（「中学校＋高等学校＋専門学校」を卒業した人）と大学卒業の母親（「高等専門学校＋短期大学＋四年制大学＋大学院（六年制大学を含む）」を卒業した人）とを比較してみると、95年調査から10年調査まで一貫して、高校卒業の母親は大学卒業の母親よりも、子どもに「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」の学歴を望む比率が高く、四年制大学卒業以上の学歴を望む比率が低い。また、四年制大学卒業以上の学歴を望む比率の差（大学卒業の母親－高校卒業の母親）は、95年調査から、20.6ポイント差→26.7ポイント差→29.9ポイント差→31.0ポイント差と変化しており、差はやや拡大傾向にある。しかし、00年調査から10年調査にかけて、高校卒業の母親が「短大・高等専門学校卒業まで」の学歴を望む比率は増加しており（9.3%→11.4%→18.0%）、「短大・高等専門学校卒業まで」を含めると、高校卒業の母親も徐々に、子どもにより高い学歴を期待するようになっているといえよう。

図２－５－３　子どもの進学に対する期待（母親の学歴別　経年比較）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで（六年制大学を含む）」は「大学院卒業まで」とたずねた。
注３）高校卒業の母親は、「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人、大学卒業の母親は、「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院（六年制大学を含む）」を卒業した人を表す。
注４）（　）内はサンプル数。

母親の約4人に1人が子どもを留学させたいと考えている

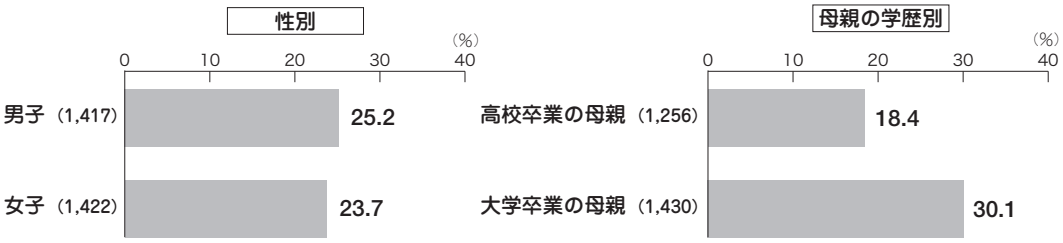
図2－5－4は、母親に、子どもを将来留学させたいと考えているかについてたずねた結果である。これをみると、母親の約4人に1人が、子どもを「留学させたい（はい）」と回答している（24.5%）。また、属性別にみると（**図2－5－5**）、子どもの性別による差はみられないが、進学に対する期待と同様に、母親の学歴による差はみられた（高校卒業の母親18.4%、大学卒業の母親30.1%）。

また、留学させたい時期をたずねたところ（**図2－5－6**）、母親全体では、「高校生のとき」（25.8%）、「大学生のとき」（18.9%）の比率が高く、「決まっていない」も45.1%と高い。留学させたい時期には子どもの性別による差がみられ、女子は「高校生のとき」の比率が高く（女子29.6%＞男子22.4%）、男子は「大学生のとき」の比率が高い（男子21.4%＞女子16.1%）。母親は、女子に対して、より早い時期に留学させたいと考えているようだ。

図2－5－4　子どもを将来留学させたいか（10年）

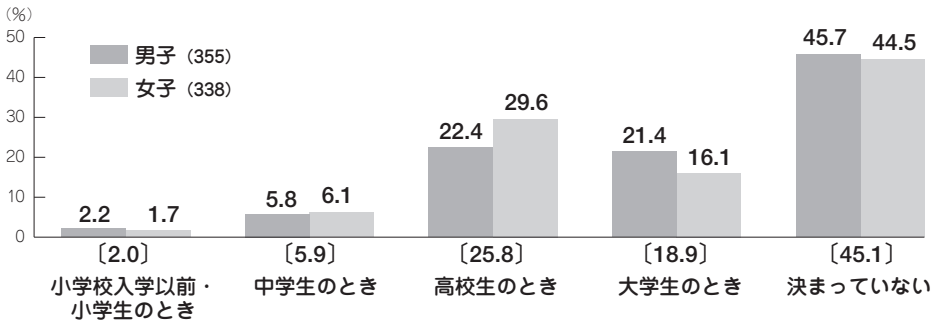
注1）母親の回答のみ分析。
注2）サンプル数は2,839人。

図2－5－5　子どもを将来留学させたいか（属性別　10年）



注1）母親の回答のみ分析。
注2）「はい」の%。
注3）高校卒業の母親は、「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人、大学卒業の母親は、「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院（六年制大学を含む）」を卒業した人を表す。
注4）（　）内はサンプル数。

図2－5－6　子どもを留学させたい時期（性別　10年）



注1）「お子様を将来、留学させたいとお考えですか」の設問に「はい」と回答した母親の回答のみ分析。
注2）〔　〕内は全体値。
注3）（　）内はサンプル数。

第6節 教育費・今後の投資意向

習い事などにかかる教育費の支出は、この15年のなかで、10年調査がもっとも低い。子どもの年齢があがるにつれ、教育費支出は増加する。

子育てや教育にかかる費用をどのように捻出するかは、家族にとって大きな問題である。教育費の支出は、この15年の間で、どのような変化をしているのだろうか。

習い事などにかける教育費の支出は、10年調査がこの15年のなかでもっとも低い

そこで、子どもにかかるさまざまな子育てや教育の費用のうち、主に習い事などにかかる、子ども１人、１か月あたりの費用をみていこう。具体的には、「現在のお子様１人にかかる、１か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用はいくらですか。（幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます）」とたずねた（なお、質問文は、調査回によって、若干の変更を行っている。詳細は**図２－６－１**の注２を参照のこと）。

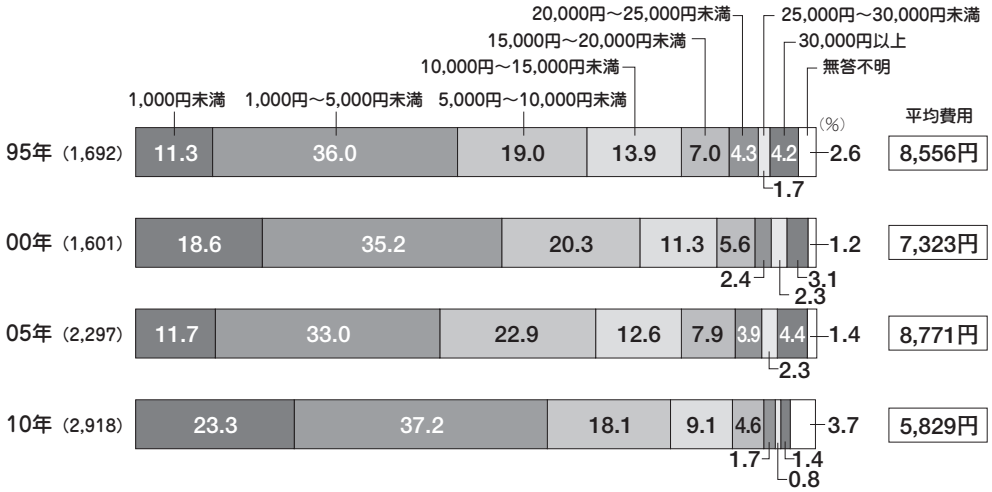
図２－６－１は、習い事などにかかる教育費について、経年比較を行ったものである。これによると、10,000円以上を支出している層の比率は、00年調査の24.7％から、05年調査では31.1％に増加したが、10年調査では17.6％と再び減少している。また、05年調査では「1,000円未満」の比率が11.7％であったのが、10年調査では23.3％と倍増しており、ほとんど費用をかけない層が増加していることがわかる。その一方で、「1,000円～5,000円未満」と「5,000円～10,000円未満」の層の比率は、05年調査では合わせて55.9％、10年調査では55.3％とあまり変化していない。このように、「ほとんど費用をかけない」「多くの費用をかける」という両極において、変化が大きいことがわかる。

また、「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円のように置き換えて平均換算すると、10年調査の全体平均は5,829円相当となり、05年調査の8,771円相当からすると、3,000円近くも減少している。これは過去15年の４回の調査のなかで、もっとも低い。

子どもの年齢があがるにつれ、教育費支出は増加

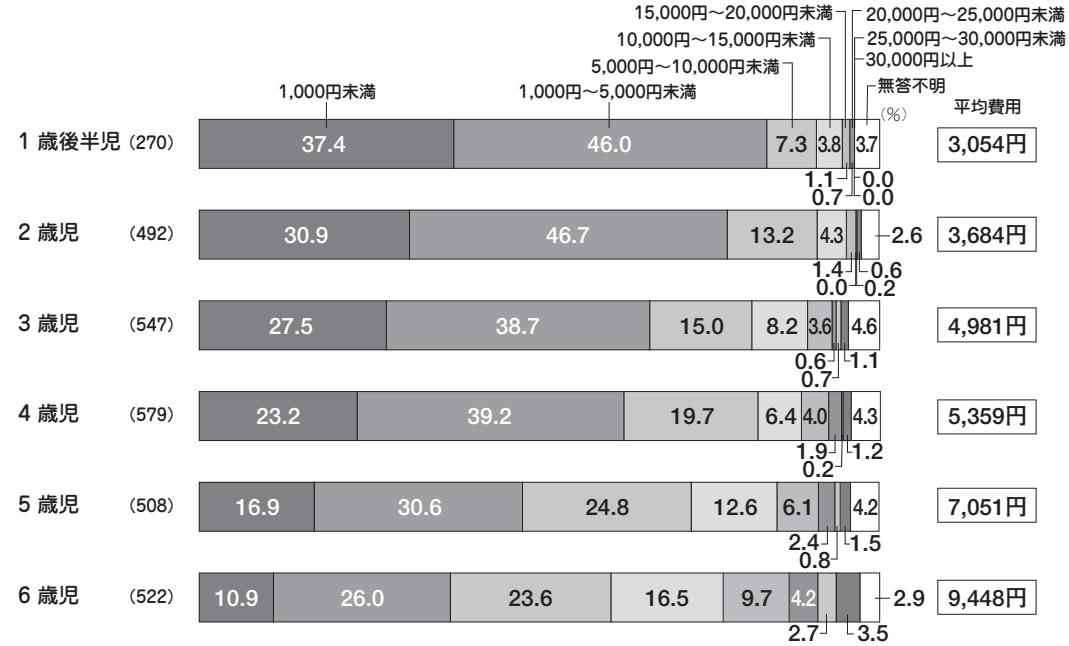
次に、10年調査において、子どもの年齢別に、教育費をみたものが**図２－６－２**である。これによると、教育費支出は子どもの年齢があがるにつれて、明らかに増加していくことがわかる。１歳後半児においては、5,000円未満（「1,000円未満＋1,000円～5,000円未満」）の割合が８割を超え、平均費用も3,000円程度である。これが、６歳児では36.9％になり、平均費用も9,000円台相当になっている。このように、教育費支出は、子どもの年齢と大きく関係していることがわかる。

図２－６－１　１人あたりの教育費（経年比較）



注１）平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
注２）10年調査は「１か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用はいくらですか。（幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます）」とたずねている。95年、00年、05年調査は「幼稚園・保育園にかかる費用（就園補助等も含めて）を除いた、１か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用を教えてください」とたずねている（ただし、95年は、質問文に「（就園補助等も含めて）」と「絵本・玩具」の部分は含まない）。
注３）（　）内はサンプル数。

図２－６－２　１人あたりの教育費（子どもの年齢別　10年）



注１）１歳後半児は、１歳６か月～１歳11か月の幼児。
注２）平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
注３）「１か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用はいくらですか。（幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます）」とたずねている。
注４）（　）内はサンプル数。

高年齢（4歳～6歳）の幼稚園児と保育園児では、教育費に差

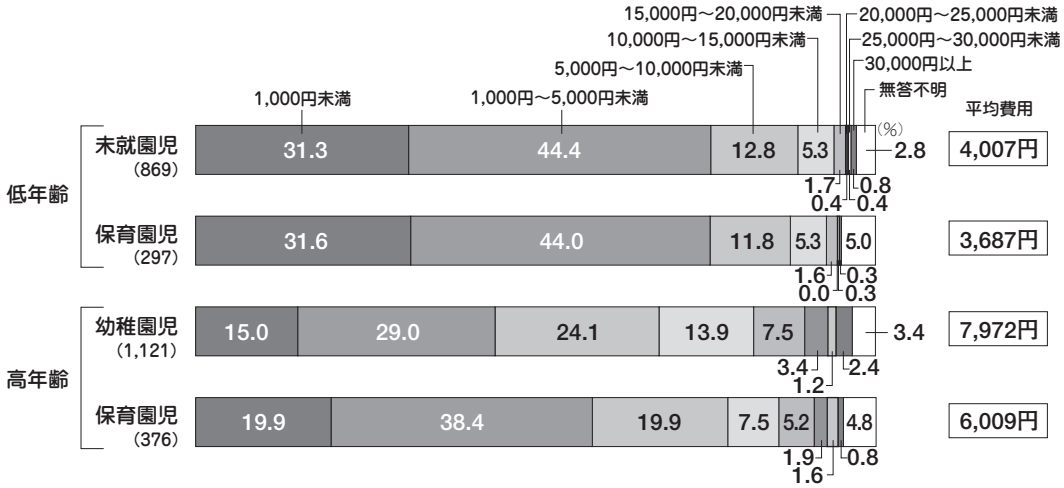
次に、習い事などの教育費と、就園状況との関係をみたものが、**図2－6－3**である。低年齢（1歳6か月～3歳11か月）については、未就園児と保育園児を、高年齢（4歳0か月～6歳11か月）については、幼稚園児と保育園児を比較した。これによると、低年齢では、未就園児と保育園児とであまり違いはみられなかった。これに対して、高年齢では、幼稚園児と保育園児とで差がみられた。たとえば、5,000円未満（「1,000円未満＋1,000円～5,000円未満」）の比率は、幼稚園児では44.0%だが、保育園児では58.3%である。平均費用も幼稚園児が7,972円、保育園児は6,009円となっていた。

教育費は世帯年収との関連性がみられる

本節の冒頭でも述べたように、子育てや教育にかかる費用をどのようにして捻出するかは、家族にとって大きな問題であろう。そこで、習い事などの教育費と、世帯年収との関連についてみておきたい（**図2－6－4**）。

これによると、世帯年収があがるにつれ、習い事などの教育費も多く支出している層が増えることがわかる。たとえば、世帯年収が「400万円未満」の層では、習い事などの教育費が「1,000円未満」の比率が32.9%、「1,000円～5,000円未満」の比率が41.1%で、合計74.0%が5,000円未満となっている。これに対して、「600万～800万円未満」の層では、5,000円未満の比率の合計は56.0%、さらに「1,000万円以上」の層では45.3%となっている。また、平均費用をみても、世帯年収と教育費は相関していることがわかる。こうした点については、子育てや教育の環境を考えるうえで、今後さらなる検討が必要な観点であろう。

図2－6－3　1人あたりの教育費（子どもの年齢区分別・就園状況別　10年）



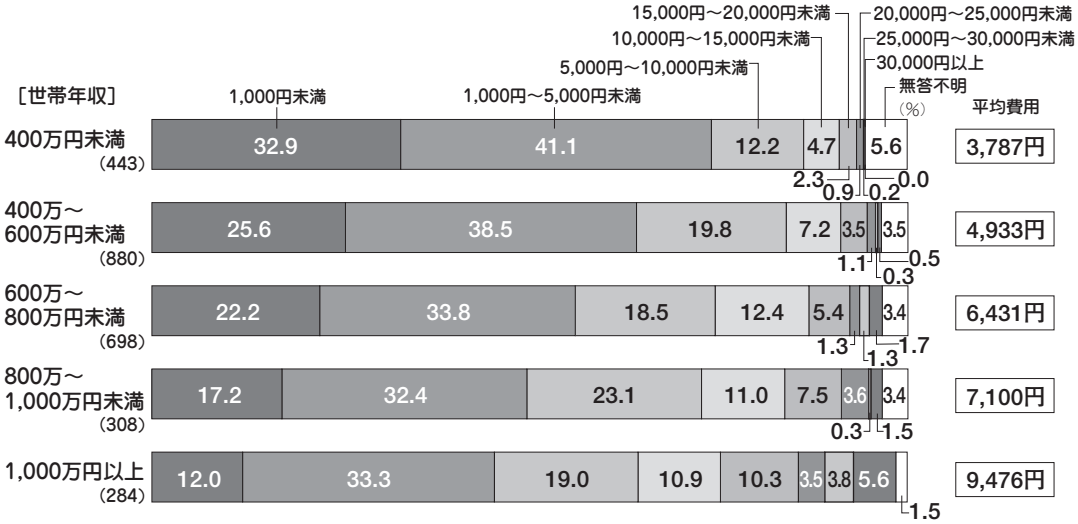
注1）平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
注2）「1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用はいくらですか。（幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます）」とたずねている。
注3）調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。
高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
注4）（　）内はサンプル数。

幼稚園児の園にかかる費用は「2万円台」「3万円台」が約4割ずつ

これまで、習い事などの費用についてみてきたが、次に幼稚園や保育園にかかる費用についてみておきたい。具体的には、「現在のお子様1人にかかる、1か月あたりの幼稚園・保育園にかかる費用はいくらですか。（保育料や、幼稚園・保育園で有料で習っている習い事の費用を含みます）」とたずねた。

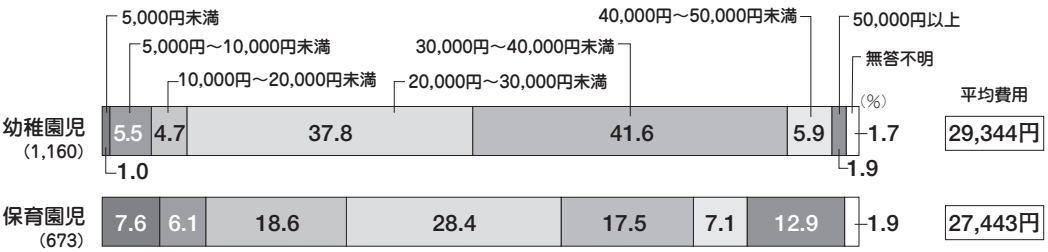
図2－6－5は、幼稚園と保育園とに分けて、園にかかる費用をみたものである。これによると、幼稚園児については、「20,000円～30,000円未満」と「30,000円～40,000円未満」とが、それぞれおよそ4割前後であったが、保育園児についてはかなりばらつきがみられた。平均費用に換算すると、幼稚園児は29,344円、保育園児は27,443円であった。

図2－6－4　1人あたりの教育費（世帯年収別　10年）



注1）平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～ 5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
注2）「1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用はいくらですか。（幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます）」とたずねている。
注3）（　）内はサンプル数。

図2－6－5　園にかかる費用（就園状況別　10年）



注1）子どもを園に通わせている人のみ回答。
注2）平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
注3）（　）内はサンプル数。

保育園児の費用は、低年齢（1歳半～3歳）と高年齢（4歳～6歳）とで差

保育園に関しては、対象とする幼児の年齢層が幅広い。そこで、低年齢（1歳6か月～3歳11か月）と、高年齢（4歳0か月～6歳11か月）とに分けて、園の費用の違いをみたものが、**図2－6－6**である。

これによると、低年齢の場合にもっとも多かったのは「50,000円以上」の25.9％で、次いで「20,000円～30,000円未満」の19.8％となっていた。平均費用に換算すると、33,355円である。一方、高年齢の場合にもっとも多かったのは「20,000円～30,000円未満」の35.5％で、次いで「10,000円～20,000円未満」の25.2％であった。平均費用に換算すると、22,578円である。同じ保育園の場合でも、子どもの年齢による違いがあることがわかる。

子どもの年齢があがると、教育費の負担感は増える

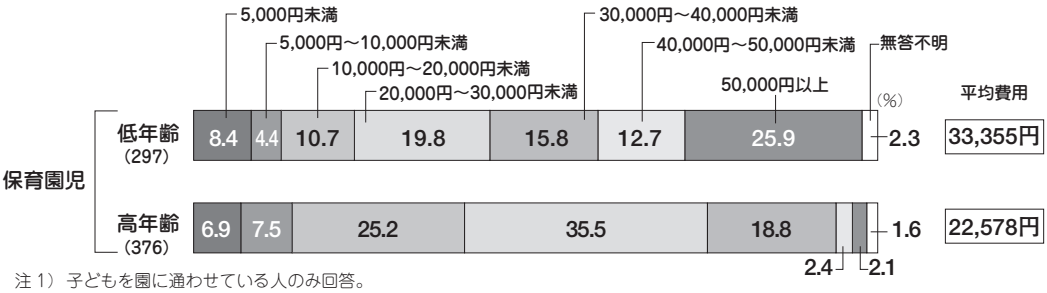
本節では、これまで習い事や園などの教育費支出についてみてきた。ではこうした支出について、保護者はどのように感じているのだろうか。そこで、「お子様の教育費に負担を感じますか」（教育費の負担感）と、「もっとお子様の教育にお金をかけたいと思いますか」（今後の教育費の投資意向）とたずねた結果をみていきたい。なお、ここでは母親の回答のみを抽出して集計・分析する。

図2－6－7は、教育費の負担感についてたずねた結果である。1歳6か月から6歳11か月の幼児をもつ母親全体でみると、負担を「感じる（とても＋まあ）」が53.3％、「感じない（あまり＋ぜんぜん）」が45.8％となっており、おおむね二分される結果となった。これを、低年齢（1歳6か月～3歳11か月）と、高年齢（4歳0か月～6歳11か月）とに分けてみると、低年齢では負担を「感じる（とても＋まあ）」という回答は37.4％であるのに対し、高年齢では負担を「感じる」という回答は66.8％まで増加する。図2－6－2でみたように、習い事などの教育費は子どもの年齢があがるにつれて増加しており、こうした点が反映されているものと考えられる。

「子どもの教育にもっとお金をかけたいと思うか」についての考え方は二分されている

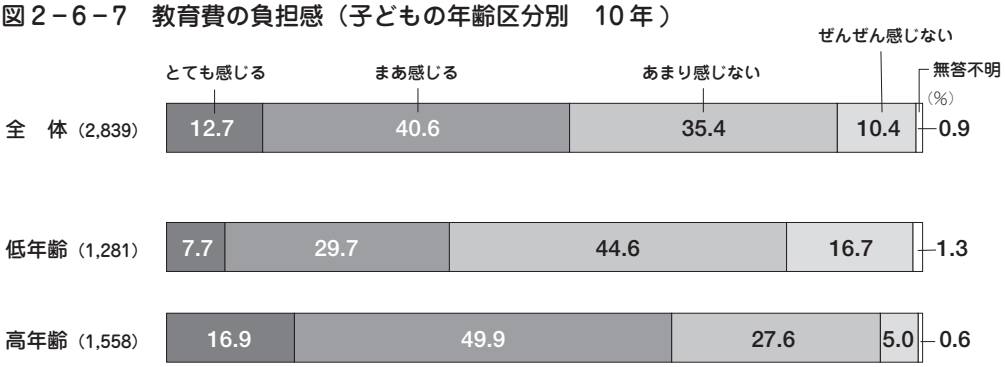
図2－6－8は、今後の教育費の投資意向をたずねた結果である。1歳6か月から6歳11か月の幼児をもつ母親全体でみると、もっと子どもの教育にお金をかけたいということについて、「そう思う（とても＋まあ）」が52.7％、「そう思わない（あまり＋ぜんぜん）」が46.5％と、考え方が二分される結果となった。さらに、低年齢と高年齢とに分けてみたが、子どもの年齢層による違いはみられなかった。

図２－６－６　園にかかる費用（保育園児　子どもの年齢区分別　10年）



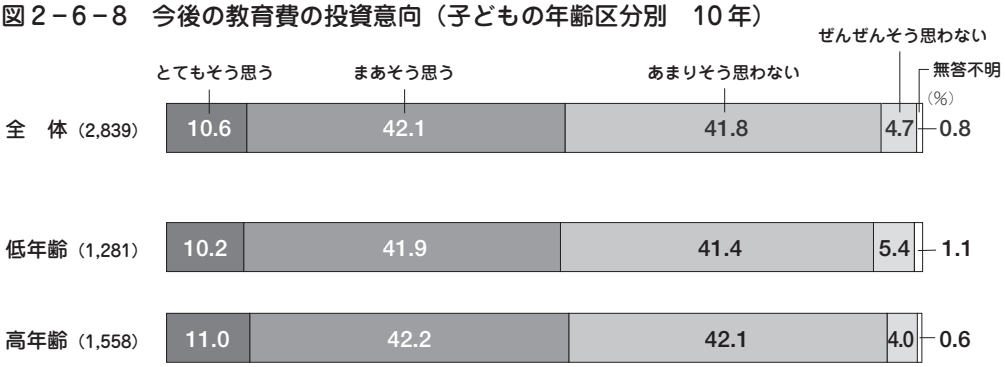
注１）子どもを園に通わせている人のみ回答。
注２）平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。
注３）調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
　　低年齢：１歳６か月～３歳11か月の幼児。
　　高年齢：４歳０か月～６歳11か月の幼児。
注４）（　）内はサンプル数。

図２－６－７　教育費の負担感（子どもの年齢区分別　10年）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
　　低年齢：１歳６か月～３歳11か月の幼児。
　　高年齢：４歳０か月～６歳11か月の幼児。
注３）（　）内はサンプル数。

図２－６－８　今後の教育費の投資意向（子どもの年齢区分別　10年）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
　　低年齢：１歳６か月～３歳11か月の幼児。
　　高年齢：４歳０か月～６歳11か月の幼児。
注３）（　）内はサンプル数。

第7節 子育て意識

母親の就業状況や子どもの就園状況、家庭の世帯年収の差によって、母親が子育てに対して否定的な感情を抱く比率に違いがみられる。とくに専業主婦では、5年前、10年前と比べて否定的な感情が減少傾向にある一方で、常勤者やパートタイムでは以前よりも高まっている。

子育てへの否定的な感情は減少傾向

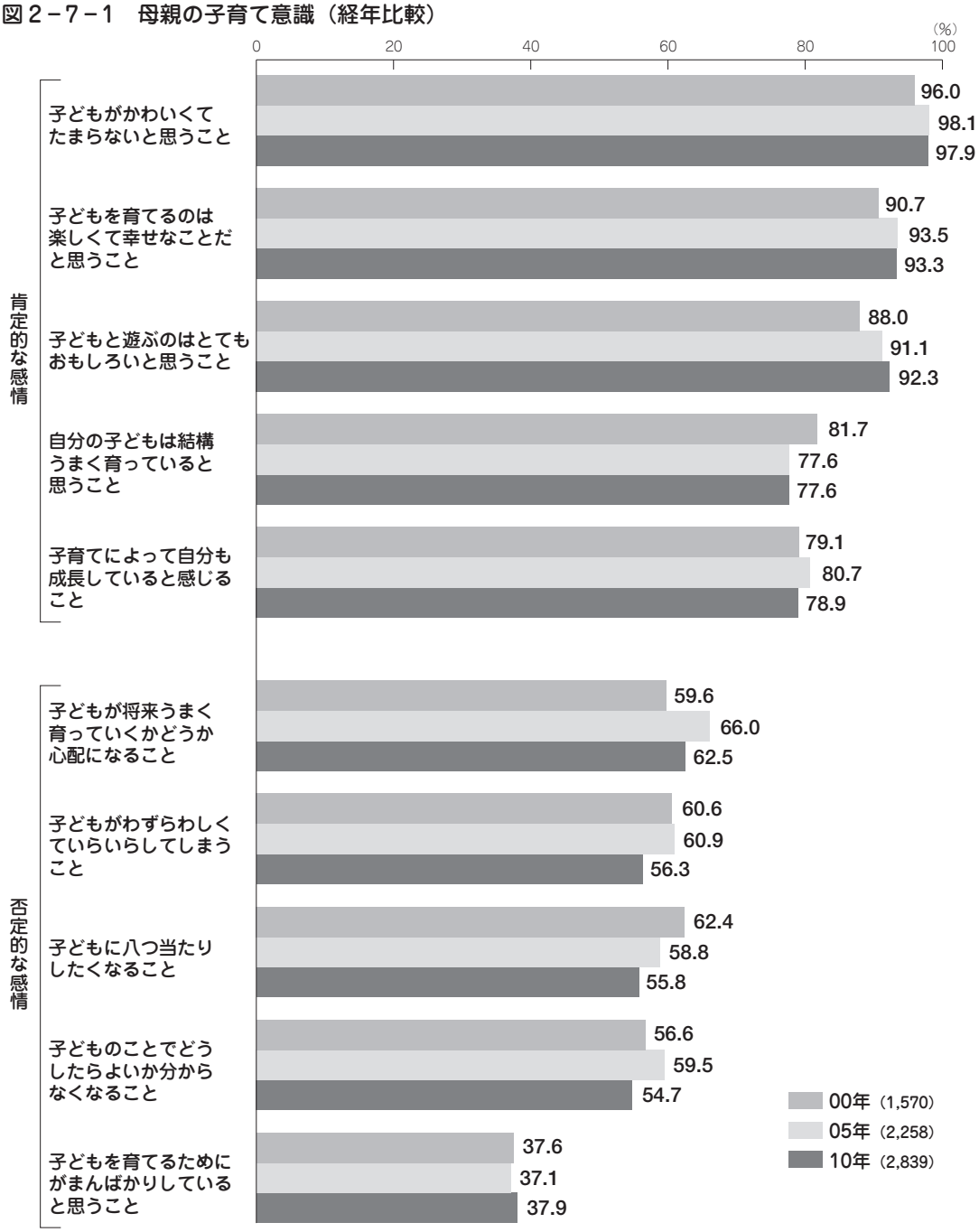
図2－7－1は、母親が抱く子育て意識に関する10年間の変化をまとめたもので、上5項目は子育て意識の肯定的な側面、下5項目は否定的な側面についてたずねた結果である。全体的な傾向として、「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」や「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」など、肯定的な感情については大きな変化はなく、いずれの項目についても8～9割の母親が「よくある」あるいは「ときどきある」と答えている。その一方で、否定的な感情については、おおむね減少傾向にあることがわかる。「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」と「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」については、それぞれ00年から05年にかけて上昇しているが、今回の調査では減少に転じている。これらの項目は、子どもの育ちや母親自身の育て方に対する不安感を説明したものと言えるが、5年前に比べて、こうした迷いを抱える母親の比率は減っているようだ。また、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」や「子どもに八つ当たりしたくなること」といった子育てへの負担感も緩やかに減少している。

専業主婦の否定的な感情は減少、常勤者・パートタイムは増加

図2－7－2に示したのは、ここ5年間の子育て意識の変化を母親の就業状況別に分析した結果である。05年の調査以降、母親の就業状況についてたずねる項目に修正を加えているため、それ以前のデータと単純に比較することが難しい。そこで、ここでは05年から10年にかけての変化をまとめる。

母親の主な就業状況として、専業主婦、常勤者、パートタイムの3群に分けて分析した結果、専業主婦が否定的な感情に関する項目に「よくある」あるいは「ときどきある」と答えている比率は減少傾向にある一方で、常勤者とパートタイムの母親では全体的に増加傾向にあることがわかった。とくに常勤者では、5項目すべてで5年前よりも増加している。従来の調査研究では、常勤者よりも専業主婦のほうが育児不安や育児ストレスの高いことがたびたび指摘されてきた。たしかに10年の調査結果だけをみると、専業主婦のほうが常勤者よりも否定的な感情を抱く比率が高いといえるが、この5年間の変化が今後も続くとすれば、今後は、常勤者のほうが育児に対して負担感や不安感を強く抱くようになるかもしれない。そして、両者以上に育児に対して強い否定的な感情を抱いているのが、パートタイムの母親であり、10年では専業主婦と同じくらい、あるいはそれ以上の負担や不安を抱えている様子がうかがえる。昨今の不

図２－７－１　母親の子育て意識（経年比較）



注１）「よくある＋ときどきある」の%。
注２）母親の回答のみ分析。
注３）（　）内はサンプル数。

況により、パートタイムで就労する母親が増加している。家計を支えるために、いわば働かざるを得なくなった状況が、子育てにおける母親の負担をより増大させていることも予想される。

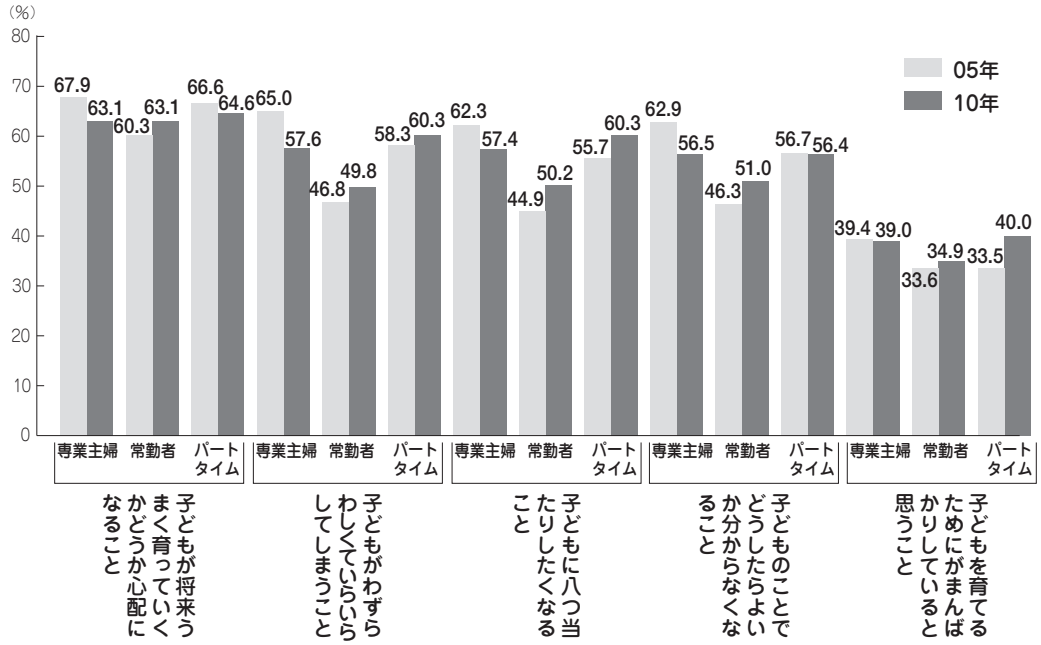
子どもの就園状況による違い

次に子どもの年齢と就園状況による育児感情の違いについて分析した。**図２－７－３**は、１歳６か月から３歳11か月までの低年齢児をもつ母親の子育て意識、**図２－７－４**は、４歳以上の高年齢児をもつ母親の意識をそれぞれ就園状況ごとにまとめたものである。

まず、低年齢児についてみてみると、未就園児をもつ母親の否定的な感情は、10年前、５年前と比較して変化なしか減少傾向にあることが確認できる。とくに「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」と「子どもに八つ当たりしたくなること」については、10年前と比較して、それぞれ8.2ポイントと11.1ポイント減少している。幼稚園、保育園に子どもを通わせていなくても、日中、子どもを連れていける遊び場などが以前よりも増えたことにより、未就園児をもつ母親の負担感やイライラが軽減されているのかもしれない。しかし、その一方で、保育園児をもつ母親については、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」が緩やかに上昇しており、未就園児の減少傾向とは対象的な結果となっている。

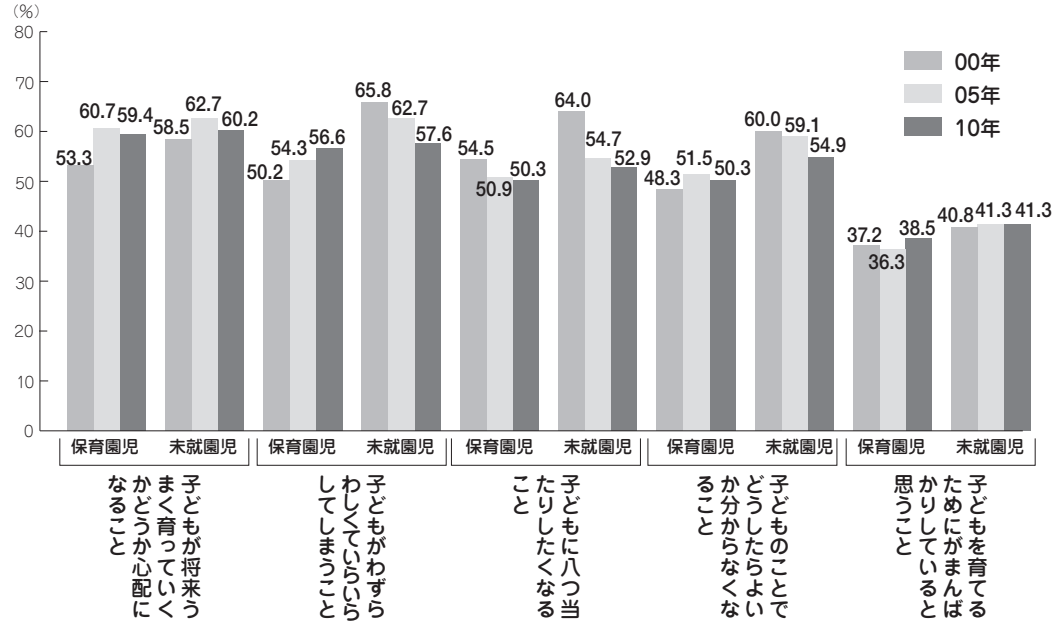
４歳以上の高年齢児をもつ母親についてみてみると、幼稚園児をもつ母親の否定的な感情は５年前と比べて減少傾向に、そして、保育園児をもつ母親の場合は増加傾向にあることがわかる。05年ではすべての項目で、保育園児よりも幼稚園児のほうが高かったが、10年ではその差はほとんどなくなっており、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」と「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」

図２－７－２　母親の子育て意識（母親の就業状況別　経年比較）



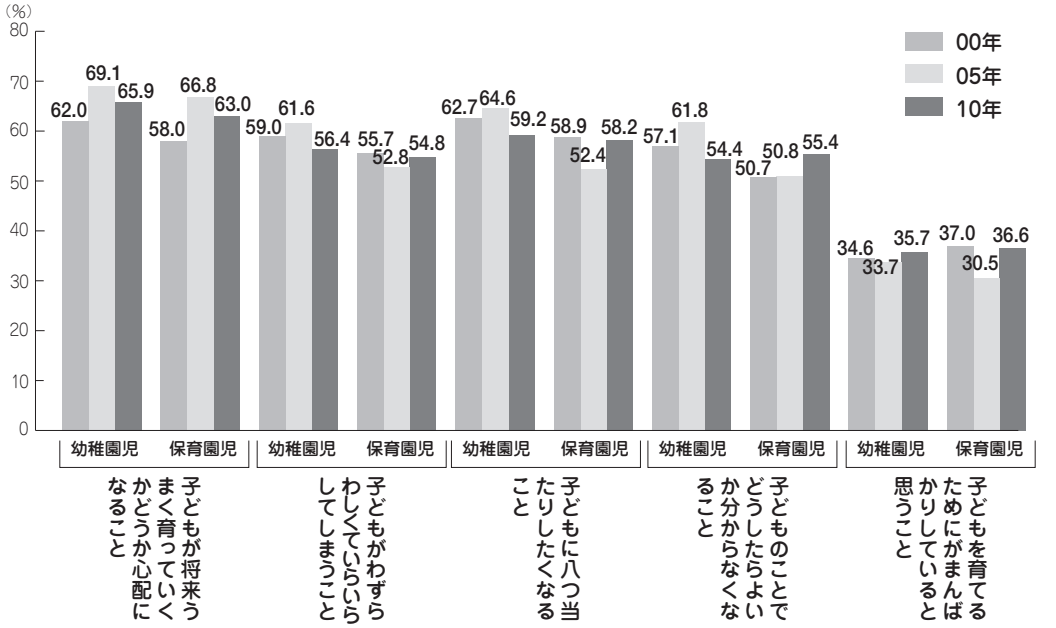
注１）「よくある＋ときどきある」の%。
注２）母親の回答のみ分析。
注３）10項目のうち、否定的感情をあらわす５項目を図示。
注４）サンプル数は05年（専業主婦1,578人、常勤者213人、パートタイム253人）、10年（専業主婦1,608人、常勤者405人、パートタイム465人）。

図２－７－３　母親の子育て意識（就園状況別（低年齢）　経年比較）



注１）「よくある＋ときどきある」の%。
注２）母親の回答のみ分析。
注３）10項目のうち、否定的感情をあらわす５項目を図示。
注４）子どもの年齢区分は以下のとおりである。
　　低年齢：１歳６か月～３歳11か月の幼児。
注５）サンプル数は00年（未就園児718人、保育園児116人）、05年（未就園児1,100人、保育園児209人）、10年（未就園児850人、保育園児291人）。

図２－７－４　母親の子育て意識（就園状況別（高年齢）　経年比較）



注１）「よくある＋ときどきある」の%。
注２）母親の回答のみ分析。
注３）10項目のうち、否定的感情をあらわす５項目を図示。
注４）子どもの年齢区分は以下のとおりである。
　　高年齢：４歳０か月～６歳11か月の幼児。
注５）サンプル数は00年（幼稚園児494人、保育園児120人）、05年（幼稚園児667人、保育園児151人）、10年（幼稚園児1,094人、保育園児355人）。

んばかりしていると思うこと」については、ごくわずかではあるが、保育園児のほうが幼稚園児の比率を上回っている。

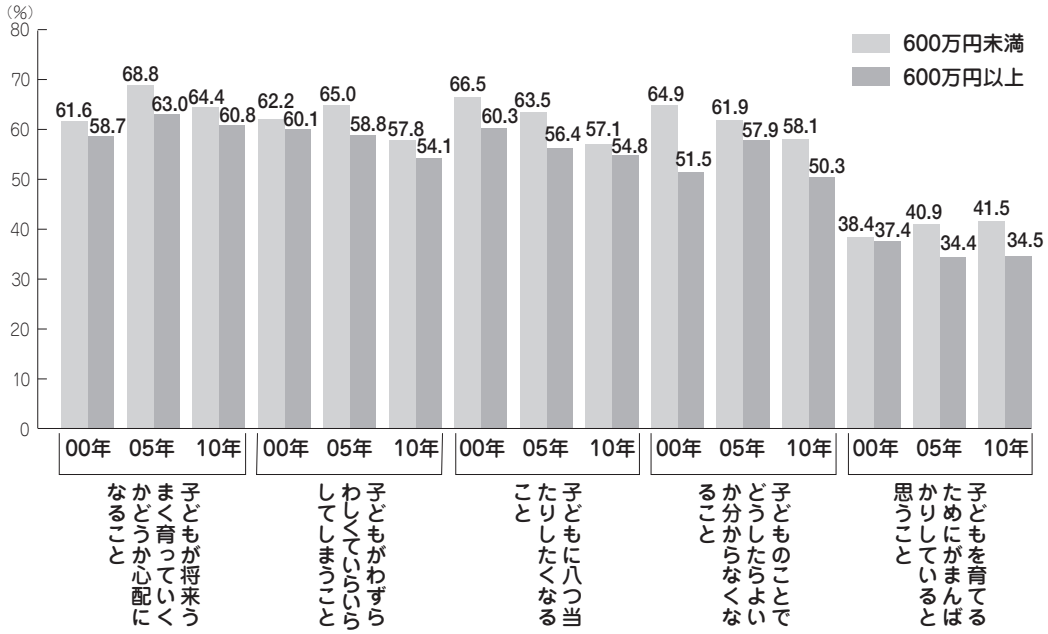
専業主婦の場合、社会から孤立した密室状態の子育てが母親の焦燥感や疲労感を高めてしまう要因になるといわれてきたが、保育園児をもつ母親の多くは有職であるため、日中そういった状況には陥りにくい。それにもかかわらず、子育てに対する負担感や不安感が強まっているということは、仕事との両立に困難を感じ、心理的なゆとりを失う母親が増えているということではないだろうか。

世帯年収と子育て意識との関連

すでに述べたように、働かざるを得ない母親の増加とともに、そうした母親が子育てに対して否定的な感情を抱く比率も高まっていることが予測されうる。では、世帯収入の経済的状況の違いにより、子育てへの負担感や不安感の程度にも差がみられるのだろうか。**図２－７－５**は、世帯年収と母親の子育て意識との関連を示した結果である。世帯年収は、600万円未満とそれ以上との２群に分けて分析している。

図からわかることは、00年、05年、10年のどの調査でも、世帯年収が高いほうがそうでない家庭よりも、母親の育児への否定的な感情を抱く比率が低いということである。とくに「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」については、この10年間で両者のポイントの差が開きつつある。経済的なゆとりと子育てに対して感じる“がまん”には何かしらの関連があるといえるだろう。

図２－７－５　母親の子育て意識（世帯年収別　経年比較）



注１）「よくある＋ときどきある」の%。
注２）母親の回答のみ分析。
注３）10項目のうち、否定的感情をあらわす５項目を図示。
注４）サンプル数は世帯年収600万円未満（00年586人、05年1,041人、10年1,285人）、600万円以上（00年818人、05年932人、10年1,258人）。